京都大学言語学懇話会
2010–2011 年度 活動報告

例会報告

第 84 回例会

日時・場所　2010 年 12 月 11 日 (土) 13:30–16:45 於文学部新館第一講義室

研究発表　「契丹語研究の現段階」

武内 康則 (京都大学)

「トーロ語における他動詞の自動詞的用法」

梶 茂樹 (京都大学)

第 85 回例会

日時・場所　2011 年 4 月 9 日 (土) 13:30–16:45 於文学部新館第一講義室

研究発表　「延辺朝鮮語の音韻」

申 英姫 (京都大学)

「比較対応の幻想」

吉田 和彦 (京都大学)

第 86 回例会

日時・場所　2011 年 7 月 9 日 (土) 13:30–16:45 於文学部新館第一講義室

研究発表　「サモエード諸語とツングース諸語」

松本 亮 (京都大学)

「ソグド語文献研究と言語学」

吉田 豊 (京都大学)

契丹語研究の現段階

武内康則

契丹語は歴史上で契丹と呼ばれていた民族の使用した言語である。契丹語は死語となっており、現在も十分には解明されていない。本発表では契丹語についての近年の研究を紹介し、契丹語文献に現れる中国語からの借用語の特徴や統計を用いた音価推定の試みについて論じた。

はじめに契丹語の資料について解説した。契丹語の言語資料は大きく分けて、漢字によって音写された語彙と契丹文字で記された資料がある。契丹文字資料は近年陸続と発見されており、契丹小字の初歩的な解読に成功した 1980 年代と比べると契丹文墓誌の量は数倍となっている。契丹文字の解読も進み、契丹文墓誌については墓主の親縁関係や経歴を読み取ることが可能となっている。近年発表された契丹語の研究や資料について紹介を行った。

次にモンゴル諸語や鮮卑系の言語との比較から契丹語の言語特徴について論じた。拓跋語 *ɲaqan「狗(笱)」; 契丹語 伏力 ɲ-aq「犬」のような硬口蓋鼻音の存在、拓跋語*eulen 「雲」; 契丹語ㄣ平 əu-ul 「雲」; モンゴル文語 egüle-n 「雲」などに見られる母音間の-g-の脱落、契丹語 业平夕 p-ul-ug 「閏」; 満州語 fulu 「多い, 余った」; 中期モンゴル語 hüle'u 「多餘」に見られる p-などの特徴が契丹語に見られることを示した。

契丹文字が使用されていた当時には、中国語との接触があったために、契丹文中には多くの中国語からの借用語がみられる。中国語は喉音に関しては比較的単純な音韻体系であるのに対し、契丹語と関係があるとされるモンゴル諸語は比較的複雑である。ウイグル文字によって記されたモンゴル語資料に見られる中国語からの借用語の表記と比較することによって、当時の中国語の音声的な特徴を明らかにし、契丹文字の表記には中国語においては同じ音素の範疇として知覚される異音が、軟口蓋や口蓋垂において複雑な音韻体系をもつ契丹語の使用者には異なった音として知覚され、書き分けられていたことを示した。

最後に契丹語に存在する母音調和や契丹小字の表音方法の特徴を利用し、電子化された契丹小字テキストに対して統計的な分析を行うことで、それぞれの文字が含む母音の性質を推定することが可能であることを示した。

（たけうち　やすのり）

トーロ語における他動詞の自動詞的用法

梶　茂樹
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ウガンダ西部のバンツー形のトーロ語では、「開ける」「閉める」「壊す」「曲げる」など、典型的な他動詞が、そのままの形で自動詞として用いられることがある。

(1) a. KasukáÉli a-ki.ng-ur-íre orwíÉgi. → KasukáÉli aki.ngwíÉre orwíÉgi.
Kasukaali(cl.1) SPR(cl.1)-open-TR-PERF door
“Kasukaali has opened the door.”
b. OrwíÉgi ru-ki.ng-ur-íre. → OrwíÉgi ruki.ngwíÉre.
door(cl.11) SPR(cl.11)-open-TR-PERF
“The door has been opened by somebody, and is open as a result.”
c. OrwíÉgi ru-kiòng-uk-íre.
door(cl.11) SPR(cl.11)-open-INTR-PERF
“The door has opened by itself, and is open as a result.”

(1a)において動詞-ki.ng-ur-「開ける」は他動詞である。それが他動詞であることは、他動を示す接尾辞-ur-によって示されている。(1b)においては、その同じ動詞がそのままの形で自動詞として用いられている。もちろん「ドアが開いた」ということは(1c)のように自動詞-kiòng-uk-で表現することも可能である。-uk-は自動を示す接尾辞である。(1b)と(1c)はどちらも「ドアが開いている」ことを表すが、(1c)が自然に、あるいは風などによって開いたと言うニュアンスがあるのに対して、(1b)はそこに人為的なものを感じる。中に人がいるということを暗示するのである。

ただし、この他動詞の自動詞的用法が可能になるためには、動詞は(2)の２つの条件を満たさなければならない。

(2) a. 他動詞は、「人間」を主語とし「物」を目的語とするものでなければならない。例えば「殴る」「殺す」など「人」を目的語としうるものは用いられない。
b. 完了語尾-ire/-ere がついた時制/アスペクト/叙法でしか用いられない。

なお(1b)は受身形のように訳してあるが、この言語では受身構文は行為者を示さなければならないのに対して、この他動詞の自動詞的用法では行為者は示されない。また、この他動詞の自動詞的用法は、-ta.ndik-「始める、始まる」のような自他共用動詞とも異なる。自他共用動詞は原則どんな時制/アスペクト/叙法でも用いられるが、この他動詞の自動詞的用法では、完了語尾-ire/-ere が付いた時制/アスペクト/叙法でしか用いられないのである。

（かじ　しげき）

延辺朝鮮語の音韻的研究

申 英姫

延辺朝鮮語は中国吉林省延辺朝鮮族自治州にて使用されている言語である。本発表では、延辺朝鮮語に特徴的なピッチアクセントや借用語の音韻について論じた。延辺朝鮮語はピッチアクセントを持つ言語であり、基本的に一語につき一か所高調の音節がある。収集した 1807 個の名詞のアクセントの分布を調べた結果、全ての音節が低調で現れる“0”パターンのもの（この際には付加された格助詞が高調となる）を除き、固有語では語末音節がデフォルトのアクセント位置であり、アクセントの位置は語彙的に決まっていることが再確認された。その一方で、外来語（508 個の名詞）においては、次末音節がデフォルトのアクセントの位置であり、アクセントの位置が揺れる語では、ひとつのヴァリアントは必ず次末音節の位置にアクセントがある。また、次末音節以外の位置にアクセントがある場合、その音節は重い音節である。借用の過程で母音が挿入された音節は、次末音節の位置でない限りは通常アクセントを持つことはない。更にアクセントの位置は音韻的な条件に加え、その語が日常生活に定着しているかどうかという社会言語学的なパラメータ（ファミリアリティ）も関与しており、日常生活に定着している語では音節構造に関係なく語末音節の位置にアクセントが落ちる傾向があることを論じた。外来語の導入経路についても考察を加えた。延辺朝鮮語が朝鮮半島で使用されている朝鮮語と異なる特徴の一つは現代中国語からの借用語である。901 語の現代中国語からの借用語を対象とした分析の結果、アクセントは原語（現代中国語）の声調とはっきりとした対応を示すことが明らかになった。2 音節以上の現代中国語借用語は語の長さに関係なくアクセントは語末音節か次末音節かのどちらかに出現し、原語の声調調値の組み合わせによってそのアクセントパターンをある程度説明することができた。また、アンケート調査の結果、現代中国語からの借用語においては、アクセントの位置についてもファミリアリティが関係しており、日常生活に定着している語は語末音節にアクセントを持つ傾向があり、逆に定着していない語は次末音節か、次末音節と語末音節の間で揺れが見られる傾向があることを示した。現代中国語と借用語間の子音の対応についても考察を加えた。現代中国語の無気閉鎖音は借用語において語頭では主に濃音で、語中では濃音・平音及びオプショナル（濃音と平音のどちらも容認される）で現れる。現代中国語の歯擦音に関しては、語頭・語中ともに主に濃音で現れる。これには現代中国語の阻害音の音韻環境、即ち声調・韻尾の種類・母音の広さなどの要因が延辺朝鮮語の話者の濃音・平音の認識に大きな影響を与えていると考えた。また、アンケート調査の結果、語中での子音の対応には借用語のファミリアリティが関与しており、日常生活に定着している語における阻害音は語中で平音、或いはオプショナルで現れる傾向があり、逆に定着していない語における阻害音は濃音で現れる傾向があることを示した。

（しん　えいき）

比較対応の幻想

吉田　和彦

ギリシア語-μᾶν、ヒッタイト語-(ḫ)ḫaḫat(i)、リュキア語-χagã という１人称単数中・受動態過去語尾は一見したところ規則的に対応し、*-h_2eh_2e という祖形に遡るように思える。しかしながら本発表では、これらの３つがそれぞれの言語内部の歴史のなかで二次的につくられた形式であると主張した。その理由はつぎのとおりである。基本語尾*-h_2e が反復される形態変化は後期ヒッタイト語の時期に顕著にみられるが、反復語尾だけでなく非反復語尾もなお存続しており、両者のあいだには機能的差異がない。もし印欧祖語やアナトリア祖語の時期に反復語尾がつくられていたとするなら、１千年以上にわたって反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあったことになる。このようなきわめて進行速度の遅い言語変化は非現実的である。

うえの３つの語尾のうち、ヒッタイト語の-(ḫ)ḫaḫa という反復語尾については、かなり正確なかたちでその先史を復元することができる。１人称単数中・受動態過去語尾*-h_2e は、同じ語尾をとっていた１人称単数ḫi-動詞過去語尾から形式的に区別される必要があったために、前ヒッタイト語の時期に反復されるようになった。反復語尾がまず過去形につくられたことは、リュキア語の反復語尾-χagã がやはり過去形であることからも裏付けられる。反復語尾は後に現在形と命令形にも広がったが、後期ヒッタイト語の時期になっても非反復語尾を駆逐するまでには至っていない。また随意的に過去語尾に付与される-ti が母音間で一貫してシングルで書かれている理由は、子音の弱化規則が前ヒッタイト語の時期になお作用していたことによる。これに対して、ギリシア語-μᾶν の成立に関しては語尾の反復は関与していない。語末母音脱落を受けた*-h_2 (< *-h_2e)に、対応する能動態語尾の影響が加わった*-m̥-h_2-m (> *-mām)から、おそらく音法則によって規則的に導かれたと考えられる。

本発表では、*-h_2eh_2e という祖形の再建が約 400 年にわたるヒッタイト語内部の歴史と相容れられないという根拠に基づいて、ギリシア語-μᾶν、ヒッタイト語-(ḫ)ḫaḫat(i)、リュキア語-χagã が同源ではないこと、したがって*-h_2eh_2e という祖形が幻想であることを主張した。ここでの分析は、新たなデータの追加やよりすぐれた解釈によってつねに改変されうるという祖語に内在する性格をよく例証しているように思える。

もとより祖語の再建という目標に向けて、比較方法がきわめて重要な役割を果たすことはいうまでもない。そして、比較方法を適用するときには、祖語の特徴をできるだけ多く導き出したいという思いに駆られることもあるだろう。しかしながら同時に、比較方法には限界があるということを認識する必要がある。

（よしだ　かずひこ）

サモエード諸語とツングース諸語

松本　亮

ツングース諸語はエニセイ川からオホーツク海にかけて東シベリアに広く分布し、サモエード諸語はエニセイ川からコラ半島へかけて北極海沿岸に分布する。系統関係はないが、エニセイ川流域において両言語の分布域は接しており、接触関係についてこれまでも議論になってきた。

本発表では、まず、シベリア少数言語の言語使用状況を紹介した。続いて、アルタイ諸語のひとつとして日本では比較的なじみのあるツングース諸語に対して、知名度のないサモエード諸語、特にネネツ語について、先行研究と発表者がロシアで母語話者から聴取したデータをもとに概観した。

そして、サモエード諸語とツングース諸語の言語接触の可能性について探る。言語連合を為すような強い接触関係にはなかったものの、ツングース諸語の中でもエヴェンキ語とサモエード諸語は、歴史的にシベリア南部やバイカル湖周辺からエニセイ川を北上するように広がって移動してきたことから、ある程度の接触、そしてそれにともなう言語変化の可能性がある。先行研究では主に借用語に関して論じられてきたが、本発表では、当該地域での言語類型論的観点から、エヴェンキ語とサモエード諸語の間に観察される、接触による言語変化、収斂の可能性がある文法的特徴を挙げた：項目を列挙すると、借用語の関係、派生接辞の使用程度、指定格あるいは予定格の存在、所有構造の類似、動詞否定形の形成方法、文法的一致の存在、動詞分詞形の述語使用、そして動詞条件副動詞形とそれにつく人称接辞、について説明した。

たとえば、ツングース諸語もサモエード諸語も、動詞語幹につく派生接辞が多く、生産的であるが、他のチュルク系諸語やウラル諸語にみられるような動詞連続はほとんど見られない。また、エヴェンキ語には不定対格と呼ばれる接辞があり、所有形と結びつくと、その所有接辞により表される者に向けられた行為がこれから行われることを示すが、サモエード諸語にも同じような用法をもつ「予定的人称所有形」という名詞パラダイムが、通常の人称所有形とは別に存在する（他のウラル諸語には存在しないとされる）。

これらの類似は、他の同系とされるような諸言語と比べてみても、極めて局地的に似通った特徴を示しているが、いかにして接触による変化の結果とみるのか、あるいは偶然の一致とみるのかは、今後のテーマである。

（まつもと　りょう）

ソグド語文献研究と言語研究

吉田　豊

京都大学の言語学教室には，文献に記録された死語を言語学的に研究する伝統がある．本学の名誉教授である庄垣内正弘現京都産業大学教授は，このような研究を「文献言語学」と呼んでいる．この発表ではこの「文献言語学」的研究の例として，中世イラン語の一支であるソグド語で書かれた文献を取り上げて，研究の方法や成果について解説した．

まず最初に，現在ベルリンのトルファン学研究所が保管する未発表の仏教ソグド語文献である So 13403 + So 19000 + So 10781 をとりあげた．この３断片は互いに接合し，一葉の短行貝葉を形作る．欄外のタイトルからこれが「金剛論」と呼ばれた，『金剛般若経』の注釈書の一部であったことがわかる．残念ながらその原典は見つからないが，裏面の 12-18 行目には『金剛般若経』からの引用が見える．この部分には（yp′k ZY ∂rzmy）ʃ′k′n という従来知られていない動詞の形式が見られる．対応する漢文原典は「応生瞋恨（まさに瞋恨＝yp′k ZY ∂rzmy を）生ずべかりしならん）」となっている．文脈と原典から判断して，この動詞形は過去の反事実を表していたと推定される．この推定は漢文原典が依拠した梵語原典にみられる条件法の動詞 abhavis≥yat からも支持される．この梵語形は過去を表す加音（augment）及び人称語尾 -t と未来を表す動詞語幹 bhavis≥ya-に分析できるが，ソグド語でも全く同様で，過去を表す動詞形 ʃ′「〜になった」と未来を表す小辞 k′n の組み合わせになっている．過去の反事実を表す動詞形は従来知られていないが，ここに見つかるのはその例であると考えられる．実際，同じ組み合わせは，既に発表されていたマニ教文献にも現れており，当該の文献を発表した W. Sundermann は気づいていなかったが，文脈から過去の反事実を表していたことが判明する．原典を比定することによってソグド語の新しい文法範疇が発見されることになった．

次にソグド語研究の揺籃期 20 世紀の初めに F. W. K. Müller が発表した，キリスト教ソグド語の一つの写本（従来は C５と呼ばれる）に見られる文法現象について論じた．この文献には，ほかのソグド語文献には見られない特徴として，他動詞の直接目的語の一部が，斜格の語尾 -^ をとるという珍現象がある．これも従来十分に認識されていなかった事実である．しかるに 1980 年代から，類型論の枠組みで行われた研究により，Differential Object Marking (= DOM) と呼ばれる格に関する通言語学的現象が確認されている．これは他動詞の目的語が，有生性（animacy）や定性（definiteness）によって異なる格形式をとる現象のことである．C５に見られる上述の特徴も DOM の現象であると推測されるが，実際 C５全体を調査すると，人間を指示ししかも definite な名詞や人称代名詞にだけ見られる現象であることが確認できる．DOM の発見者であり命名者でもある G. Bossong (Empirische Universalienforschung. Differentielle Objektmarkierung in den neuiranischen Sprachen, Tübingen, 1985) は，現代イラン諸方言における DOM 現象を扱っている．彼は DOM は現代諸方言にのみ見られ，古代語や中世語には見られないとしているが，この見解は改められなければならないだろう．（よしだ　ゆたか）

「京都大学言語学研究」（31 号）の原稿募集について

京都大学言語学研究（31 号）の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要項によりご提出下さい。

執筆要項

1. 提出原稿
   - 原稿種別は以下の通りとする。
     - 研究論文、研究ノート、書評
   - 完全原稿を提出すること。
   - 印刷原稿、電子記録媒体（FD, MO, CD-R など）、もしくは電子メールでの投稿を受け付ける。別途用紙もしくは電子ファイルに以下の項目を記載して提出すること。
     - 題目
     - 執筆者名 ふりがな
     - 原稿種別（研究論文、研究ノート、書評）
     - ページ数（要旨は含めない）
     - 所属機関
     - 連絡先（郵便番号、住所、電話・FAX 番号、e-mail アドレス）
     - 原稿の分野を表すキーワード（3〜5 個）
     - 要旨を英語以外の言語で提出する場合は英文タイトル
   - 電子ファイルで提出する場合は、PDF 形式で提出すること。
   - 提出原稿に特殊なフォントが含まれている場合、当該フォントが埋め込まれている PDF で提出することが望ましい。
   - PDF 以外のファイル形式で提出する場合は編集委員会までご相談下さい。
2. 研究論文
   - **原稿枚数**　原則として、図表などを含め A4 版用紙 30 枚以内とする。これを超える原稿についても投稿を受け付けるが、採用された場合でも、掲載が 32 号以降になることがある。
   - **文字のサイズ**　日本語論文は明朝体 12 ポイント（1 行 37 字程度）・1 ページ 35 行程度、欧文論文は Times 系 12 ポイント・1 ページ 35 行程度（1.5 スペース程度）とする。
   - **原稿の余白設定等**　各ページのマージンを上下左右: 30、35、30、30mm とる。印刷原稿で提出する場合、ページ番号は印字せず、右下隅に鉛筆で記入する。
   - **タイトルと氏名**　1 ページ目のはじめにタイトルと氏名（中央揃え）を入れること。タイトルは 14 ポイント太字とする。なお、タイトルの上部には 2 行分の余白を設け、タイトルと氏名の間に 1 行分、氏名と本文はじまりとの間に 2 行分の余白を設ける。匿名査読制のため、本文中に執筆者の氏名は入れないこと。また、本人が特定できるような表現はできるだけ避けること。

- **注について**　注は通し番号をつけ、各ページの末尾におく。文字サイズは 10 から 11 ポイントとすることが望ましい。
- **要旨**　A4 版用紙 1 枚の要旨を付ける。要旨は本文と異なる言語で書くのが望ましい。原稿のスタイルやタイトルと氏名の体裁については上記に準ずる。要旨文のはじまりの左上部に「要旨」「Abstract」等と太字で表記し、要旨文のはじまりとの間に 1 行分の余白を設けること。
- **採否**　編集委員会で決定し、原稿受付より二ヶ月以内に採否を連絡する。
- **原稿締切日**　原稿は随時受け付ける。ただし、2012 年 6 月 30 日を過ぎて到着した論文については、採用された場合第 31 号ではなく、それ以降の号への掲載とする。

3. 研究ノート

原稿枚数は A4 版用紙 20 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

4. 書評

原稿枚数は A4 版用紙 15 枚以内とする。体裁、採否、原稿締切日等は研究論文に準ずる。

5. 連絡先

投稿は下記住所にて受け付けます。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科言語学研究室
電話 / Fax: (075) 753-2827
電子メール: KULR-edit@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

6. その他

- 原稿及び電子記録媒体は原則として返却いたしません。
- LaTeX で執筆する場合は、上記の書式に合わせたスタイルファイルを用意していますので、編集委員まで御連絡下さい。
- 執筆者には、掲載号 1 部と掲載論文の電子ファイルを進呈いたします。抜刷を希望する方には実費にて作成いたします。
- 第 31 号は、2012 年 12 月発行を予定しています。
- 京都大学言語学研究室は、掲載原稿を電子的な手段で公開・配布する権利を有するものとします。
- 研究論文と研究ノートに関しては、同一執筆者による複数の投稿は認めません。

執筆者紹介

Priya Ananth	Middle Tennessee State University
鈴木 博之	プロヴァンス大学 / CNRS / 日本学術振興会
高 恩淑	一橋大学
バルプナル メティン	岡山大学
トート ルディ	京都大学
川澄 哲也	福岡大学

編集後記

『京都大学言語学研究』(第 30 号) の発行に際し、多くの方々からのご協力を賜りました。この場をお借りして、御礼申し上げます。また、本誌は京都大学学術情報リポジトリ (KURENAI) にて電子ジャーナルとしても公開されております。下記 URL よりご利用ください。

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bulletin/kulr/

次号より論文と研究ノートに加えて、書評の投稿も受け付けることになりました。詳しくは原稿募集のページをご覧ください。皆様のご投稿をお待ちしております。

今後とも『京都大学言語学研究』をよろしくお願いいたします。

編集委員長

『京都大学言語学研究』 第30号
Kyoto University Linguistic Research Vol.30

2011年12月25日 発行
編集委員長 齋藤 有哉
副編集委員長 キャット アダム
編集委員 倉部 慶太 グリーゼンホーファー クリストファー 佐藤 昭裕
白井 聡子 田窪 行則 仲尾周一郎 林 範彦
平子 達也 南本 徹 藪 司郎 吉田 和彦
吉田 豊 （五十音順）
発行者 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 / Fax: (075) 753-2827 http://ling.bun.kyoto-u.ac.jp/
印刷 中西印刷株式会社
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル西大路町146
Edited by Saito Yuya Catt Adam Kurabe Keita Griesenhofer Christofer
Sato Akihiro Shirai Satoko Takubo Yukinori Nakao Shuichiro
Hayashi Norihiko Hirako Tatsuya Minamimoto Toru Yabu Shiro
Yoshida Kazuhiko Yoshida Yutaka
Published by Department of Linguistics
Graduate School of Letters, Kyoto University
Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto
606-8501 Japan
Printed by Nakanishi printing Co.Ltd.
146 Nishioji-cho, Kamigyo-ku, Kyoto
602-8048 Japan
© 京都大学言語学研究室 2011 Printed in Japan
ISSN 1349-7804

ISSN 1349-7804

京都大学言語学研究

第 30 号

論 文

Form-Meaning Associations in Japanese
—Analysis of Native and Non-Native Corpus Data— . . . . . Priya Ananth 1
在音变过程中产生又消失的软腭化元音
－云南德钦燕门乡谷扎藏语之例－ . . . . . 铃木 博之 35
現代日本語における可能表現の意味分類について
—実現可能性の在り処を基準に— . . . . . 高 恩淑 51
トルコ語指示詞の文脈指示用法について
—文照応形としての *bu*, *o* の用法— . . . . . バルプナル メティン 71
非情物主語のニ受動文関連性に基づく分析へ . . . . . ルディ トート 107
漢語西寧方言の 2 音節語における声調中和現象 . . . . . 川澄 哲也 147

京都大学言語学懇話会 2010–2011 年度活動報告 157

2011
京都大学
大学院文学研究科
言語学研究室

Kyoto University Linguistic Research

Vol. 30

Articles

PRIYA Ananth:
Form-Meaning Associations in Japanese
—Analysis of Native and Non-Native Corpus Data— 1
SUZUKI Hiroyuki:
Apparition et disparition d'une voyelle vélarisée au cours de l'évolution
—le cas du dialecte de sGogrags [Guzha] parlé à Yanmen, Deqin, Yunnan—
. 35
KO Eunsook:
A Review concerning the Meaning Classification of Possibility Expressions
—Based on the Point of Realizability— 51
BALPINAR Metin:
On The Text Dependent Use of Turkish Demonstratives
—The Usage of *bu* and *o* as Sentence Anaphor— 71
RUDY Toet:
Ni-Passives with Inanimate Subjects in Japanese Towards
a Relevance-Based Analysis 107
KAWASUMI Tetsuya:
Tone in the Xining dialect 2
—A study on tone in disyllabic words— 147

The annual report of Kyoto University Linguistic Colloquia 2010–2011 157

2011

Department of Linguistics
Graduate School of Letters
Kyoto University